
正義ほど曖昧なものはない

にしON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義ほど曖昧なものはない

【Nコード】

N7918K

【作者名】

にしON

【あらすじ】

自分がやっていることが正義だ、だから僕のやっていることが正しい。

そう考えてきた僕の前に起こる数々の事件、そして出会う人々、そんな出会いを通して、気づかされる自分という者の役割、正義という言葉の曖昧さ：

さまざまな出来事を通して主人公僕が、どのようなことを思い、考え、変わっていくのか：という学園ファンタジー

プロローグ（前書き）

前半は、主人公がすごくムカつく腹立たしいなどの感情を覚えることでしょう。すみませんが、それは、作品の構成上仕方のないことです。ので、めげずに読み進めてくださると幸いです。

最後まで読んでも、やっぱり腹立たしいとかんじてしまった時は、最後の連載の後、謝罪文でもなんでも書かせていただきますので、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ

これは、僕の、青春時代誰もが通る、小さな成長の物語である……………

僕がまだ小学三年生のころの話である。

ある日、僕のクラスの田中君が、担任の先生の物である湯呑みを割った。

別に、田中君（本名…田中 一郎）が根っからのいたずら好きで、先生の湯呑みを割って楽しむようなそんな性格ではなかった。ただクラスメイトのみんなと楽しく鬼ごっこをしていただけなのだ。

ちょうどその最中、運悪く田中君の元気よく振られていた腕が、先生の湯呑みにあたった。鬼ごっこを教室の中でしていれば、誰かがいつかやってしまうことである。その誰かが田中君だった、ただそれだけの話だ。ただ、割ってしまった田中君本人が罪をすべて背負う必要がない様に思えるくらい、その湯呑みが、机から離れ、床にあたり、音を立てて割れていく光景は、自然であった。教室でその光景を見た者全員がそう感じていただろう。

だからであろうか、クラスメイト全員が田中君のことをかばったのだ。先生には、あいていた窓から急に突風が教室内に吹き込み、湯呑みを床に落としたのだと、クラス全員がそう証言した。

鬼ごっこをしていたメンバーが口をそろえてそういうのなら、わからない話でもないが、クラス全員というのはどうも不自然である。それほどコップの落下が自然に見えたのか、誰がやってもおかしく

ない、そんな風に思えるくらい自然だったのだろうか。少なくとも僕にはそう見えたし、みんながそう思っているのだろうかということが、なんとなくだがわかった。

それにその時の担任の先生は、学校の中でも怒ると恐いことで有名だったし、先生の大事にしていた湯呑みというのは、陶芸家である、大好きなお爺ちゃんの形見であるらしいのだ。それを誰かが割ったなどと知ったら、どんなとばかりが来るかわからない。そんな風に考えてる者も少なからずいただろう。

つまり、僕のクラスのとった行動は、誰もが幸せに、穏便にことをなかったことにできる選択だったわけである。先生だって風で割れてしまったと知れば、誰を恨むこともなく、机の上に置いたままにしていた自分が悪いと、そう納得できるだろう。

しかし僕は、みんなとは全く逆の方向へ動いた。

犯人は田中君であると、先生に告げたのである。

僕には、どうもクラスのみんながやっていることが『善い事』には、思えなかった。

真実を捻じ曲げて、間違った真実に全員が納得して、一番の被害者である先生が、その真実を知らないそんな状況のままでことを終わりにしてよいのだろうか。そう思ったのである。

いいはずがない、いいはずがないのだ。なぜいいはずがないのか、はつきりとした理由が小学三年生である僕にはわからなかった。しかし、僕はただ、クラスみんながやっていることは悪である、そう認識していた。

僕が先生に田中君の名前を告げた後、先生はとてつもない長い時間の説教を続けた。それが説教と呼んでいいものかと思うくらい、教室内はひどい罵声で包まれていた。最初は、よくある「先生は湯

呑みを割ってしまったことには怒っていない、けどなお前ら全員が嘘をついていたことに腹がたっているんだ」というお決まりのようなセリフをまじえ、道徳を説く形の説教だったのが、教師に対して失望感を抱くほどの言葉を終盤から、時にはぼそぼそと、時には声を荒げて喋り続けた。

終わってみれば、僕がしたことによって幸せになった者はいないのかもしれない。

しかし確かにこのとき僕は、正義という社会をハカルための定規を手に入れたのである。

カッター

さて、そんな十七年間を送った僕なのだが、今この瞬間この光景に、僕の正義は崩れかけそうなのだ。と言っても、今の状況をそのまま説明したところで何が起こっているかわからないだろう、説明には今日の朝まで時間軸を戻さねばならない。

今日は何一つ変わらない朝、いつも見るあわただしい家庭の風景だった、あえて変わっていたと言えばペットである犬のチビ丸が、今日に限って朝飯をねだってきた程度である。もちろん僕は、ペットを鎖でつなぐようなまねはしない、なんてった僕に正義に反するからな。そんなことをしなくても、僕のペットは、従順だ。きつと僕のおふれ出る正義感に尊敬の念を抱いているのだろう。うん、そうだな、そうに違いない。

僕はチビ丸の頭をくしゃくしゃでながら、「そうだろーそうだろー」と言い聞かせ正義に従順な自分をわかってくれるチビ丸と、軽いスキンシップをとった。

僕は、いつものようにコップ一杯の牛乳と、軽くイチゴのジャムを塗った食パンを1枚食べ、僕の通っている高校、私立波白学園学校へと、足を向かわせた。

僕が毎日のように歩いている通学路は、とにかくハードだ。朝からなんでこんな過酷な道を歩まねばいけないのだ、と思うほど、通学路を歩くだけで、歩く？というか走る？というか飛ぶ？まあどっちでもいい、ただそれだけで、僕の体重は、入学当初の65？から57？まで減少していた。正規の通学路を通ればたいして険しい道のりではないのだが、あれだ、あれがあるんだ、世間一般で言う魔

の踏切というものが：あまりの恐怖で、もはや誰もその踏切を横断しようなどと考えなくなってしまったあの魔の踏切、通称『敵』一応記しておくが敵と書いて『かたき』と読む。こいつのせいで、さまざまなもの（だいたい精神力と忍耐力と体力で構成）を奪われた怒りから、つけられたのだが、怖すぎる、だって……………1時間も電車が通り続けるんだから：

もはや、その線路が学校までのすべての道をふさいでいる。これでは学校にたどり着けない、ということで長年の伝統のもと編み出された、『敵』に対抗するための道があるのだ、ざっくりとその道を説明しよう。

まず最終的な目標は、線路を飛び越えること。なんたって線路ですべての道がふさがれているんだ、どこかで線路を飛び越えることができれば学校にはたどり着けない。だが、8本も敷いてある線路を横断するなんて危険にもほどがある、途中でつまずいただけで、命取りだ。じゃあどうするのか地上がダメならもう一つあるまだ通れる道が、そう、空である。僕たち、線路を挟んでこちら側にある世界の学生は、飛ぶ。どうやって飛ぶか、まず生徒はみんな学校とは逆方向に歩きます、ここは、歩いとかないと体力が持たない、この先は山登りだ。歩いて今度は、小さな山、名前か：名前なんて知らないかもしれないが、この山にも通称の名にあたるものがある、僕らの町の最終砦！その名も略して『らのの』どうしてこんなくだらない名前がついたかなんて聞かないでほしい：僕がつけたわけじゃないし、だがこの名前、生徒には人気があり敬意をこめて『らのの先生』などとみんなは呼んでいる。確かにこの山がなければ学校にたどり着くことができないんだから、それくらいの敬意をむけてもなんら不思議じゃないだろう、でもなあ、らののってなあ、なんで略し方がひらがなの部分だけをとるとかそんな適当な方法なんだよ。まったく誰がつけたんだか：まあ名前なんてどうだっていいんだ、その山を登って後はなんとなくわかるだろう。指定のポイントまで登り、そこから全速力で走り、地面を勢いよく蹴りつけ、担い

だグライダーで飛ぶ。そのまま線路のはるか頭上を越え学校の屋上に着地。学校の小さなはからいである屋上の第二玄関を通じて自分たちの教室に入っていく。ここまでが僕の通学路である。あまりの過酷さに自宅から学校までの距離が1?にもみたくない学生が下宿に入ったなんて話も聞いたことがある。まったくひどい話だ。

僕は今日も、この過酷な道を通らねばならい。結構慣れたもんだが、なれたところで、体力は奪われる。

「くっそー今日もあちーなー」

なんでも今年は夏の到来が早いようで、7月上旬にして気温は30度をゆうに超している。

「こんな中山登りなんて御免だぜ」

ぐちぐち文句をこぼしながら僕は、らののに続く道をひたすら歩いた。もうすぐらののの入口にたどり着く。

「カッターはいらんかねー」

ふとこんな声が聞こえてきたので声の主に、重たい頭を持ち上げて目線を向けた。そこには、いかにもお金に困っている感じの、汚れで白かったワイシャツが茶色くなっちゃってるおじいさんが、カッターを一本路上で売っていた。そばを通る学生は、もちろんそんな声は聞こえないと言った感じですぐそこその場を通り過ぎていく。そんな光景を見て僕の正義魂に火がついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918k/>

正義ほど曖昧なものはない

2011年1月16日07時30分発行